

疾患の有無にかかわらず子どもたちが共に生きる社会の実現を目指した児童向け体験型プログラムの開発

森崎真由美（東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻 家族看護学分野 助教）

1. 背景

日本には約 11 万人の小児慢性特定疾患患者がおり、多くは治療や療養と学校生活を両立している。慢性疾患を有する児童や医療的ケアを必要とする児童は欠席や学業、対人関係で困難を抱えやすく、学校での孤独感や拒絶感を経験しやすい。これらの生きづらさは疾患そのものよりも、周囲の理解不足や環境との相互作用により増幅される。特に学童期はクラスメイトからの理解や受容が重要であるが、児童が慢性疾患や医療的ケアについて学ぶ機会は限られている。そこで本研究は、慢性疾患児や医療的ケアを必要とする児童の「生活」に焦点を当てた体験型プログラムを開発し、共感的理解と受容的態度の醸成を目指した。

2. 目的

目的 1：患児の一人称視点動画と医療デバイスの疑似体験を用いた体験型プログラムの開発【研究 1】

目的 2：児童の「医療ニーズを有する友人への態度」を評価する尺度の開発【研究 2】

目的 3：体験型プログラムのパイロットテストおよびプログラム内容の改良【研究 3】

目的 4：体験型プログラムの効果・実施可能性・普及可能性の検証【研究 4】

3. 研究内容

【研究 1】患児の一人称視点動画と医療デバイスの疑似体験を用いた体験型プログラムの開発

- ・国内外の文献レビュー、および小児看護・家族看護の専門家による議論を通じて暫定版プログラムを作成した
- ・患児 3 名、医療者 2 名、学童保育教員 2 名へのインタビューによりプログラムを修正した



【研究 2】児童の「医療ニーズを有する友人への態度」を評価する尺度の開発

- ・既存の尺度である Chedoke McMaster Attitudes Towards Children with Handicap scale（CATCH）を参考に、低学年が回答可能な尺度を作成し、児童 6 名への認知的インタビューおよび神奈川県内 2 校の公立小学校における 127 名の児童・保護者を対象とした質問紙調査によって、尺度の信頼性・妥当性を確認した
- ・「医療ニーズを有する友人への態度尺度（13 項目）」について、クロンバック α の算出、既知集団妥当性の検証、探索的因子分析および確認的因子分析によって、信頼性・妥当性が確認された

【研究 3】体験型プログラムのパイロットテストおよびプログラム内容の改良

- ・東京都内の公立小学校 1 校において 2 年生 4 クラス（計 120 名）にプログラムを実施し、クラス担任からのフィードバックを得て改良した

【研究 4】体験型プログラムの効果・

実施可能性・普及可能性の検証

- ・東京都・神奈川県内の学童保育事業所 12 か所において、非ランダム化クラスター前後比較試験を行い、体験型プログラムの効果を検証した
- ・介入群（5 施設 34 名）、対照群（7 施設 19 名）が参加し、介入前における両群の属性および「医療ニーズを有する友人への態度尺度」得点の有意差はみられなかった
- ・介入後において「医療ニーズを有する友人への態度尺度」得点が、介入群の方が対照群より有意に高く、体験型プログラムの効果が示された

4. 本研究の成果と今後の課題

低学年児童を対象に疾患や障がいを持つ仲間への態度を測定することができる「医療ニーズを有する友人への態度尺度」を開発した。

また、45 分×2 回の構成で小学校・学童保育で展開できる体験型プログラムが開発され、その効果が検証された。

今後は、学校・学童保育における普及のための戦略を検討する必要がある。

入院生活動画について
主人公目線の内容になっていたり、2 年生という同じくらいの子どもの気持ちになっていて、子どもたちは身近に感じる事ができたと思う。
自分たちの時間の流れと入院している同い年の児童の時間の流れを比較しながら、生活の違いを比べながら動画を流して下さったことでとても分かりやすかった。

ディスカッションタイムの問いかけについて
動画の主人公の「気持ち」を考え、答えることは意外と難しい。自分と同じところや違うところを考えさせてもいいかもしれない。
漠然とした質問だと難しいと思うので、具体的な場面や行動を例に出してあげるとよい。
体が不自由な人と一緒に遊ぶアイデアがたくさん出たので、「あなたなら、どのようにルールを工夫しますか？」という問いは盛り上がるかもしれない。

全体的な感想
2 年生だけど、発問に対し、子ども達が、積極的に回答している姿は、印象的だった。
難しい内容かなと思いましたが、動画があったことで子供たちも興味をもって取り組んでいた。

クラス担任からのフィードバック内容(一部抜粋)



プログラム実施の様子(2025 年 12 月)